

# 東京府立第四高等女学校における野矢トキの授業実践 —昭和 11 (1936) 年卒業生の『音楽ノート』を手がかりに—

越山沙千子

生活文化学科 音楽教育研究室

Songs sung at the Tokyo Prefectural Fourth Girls' High School  
—Using “Musical Notes” of a student who graduated in 1936 as clues—

Sachiko KOSHIYAMA

Department of Human Sciences and Arts, Jissen Women's University

The purpose of this study is to clarify what classes were taught by a music teachers at Tokyo Prefectural Fourth Girls' High School, Toki NOYA (1891-1945), using “Musical Notes” of a student who graduated in 1936 as clues. It is to clarify the classes' characteristics. In Noya's class, works that belonged to Western music were sung with Japanese lyrics, and the original songs included many folk songs, traditional songs, art songs, and opera arias. In addition, students were able to learn music theory through singing songs that were devised to cover commonly used time signatures and tones, and considered to fit within the mezzosoprano range so that they could be easily sung. It further became clear that the songs were selected from various musical scores, not just textbooks, including the songs that had been sung from generation to generation and those incorporating the flow of the times.

Keywords : Girls' High School (高等女学校), Class Practice (授業実践), Songs (歌), Music Theory (楽典),  
Early Showa Era (昭和初期)

## 1. 研究の対象

### 1-1. 研究の背景と目的

明治 24 (1891) 年、中学校令の改正により、「高等女学校」が女子の中等教育機関として規定された。同年、八王子<sup>1)</sup>でも、横川楳子 (1853-1926)<sup>2)</sup> が私立八王子女学校を設立し、多摩地域の女子教育の礎を築いた。明治 32 (1899) 年、道府県に高等女学校の設置義務を課した高等女学校令が公布されると、東京府でも明治 34 (1901) 年に第一高等女学校 (現: 都立白鷗高等学校)、翌年に第二高等女学校 (現: 都立竹早高等学校)、明治 38 (1905) 年に第三高等女学校 (現: 都立駒場高等学校) が開校したが、いずれも東京市部 (現在の 23 区) にあった。そして、八王子にも公立の女学校を設立したいという地域住民の思いが高まり、教育に力を注ぐあまり財政難に陥っていた私立八王子女学校を継承する形で、明治 41 (1908) 年東京府立第四高等女学校 (現: 都立南多摩中等教育学校、以後第四) が開校した。明治末から終戦の頃、多摩を中心に東は杉並、世田谷から、

西は相模湖、藤野、上野原周辺から生徒が集まった第四は、良妻賢母教育だけではなく、女学生文化の中心地としても大きな役割を果たした。

高等女学校の文化は、生徒や卒業生を通して、家族をはじめとする身近な人に広まり、次の世代に伝わるということも起こっただろう。とりわけ歌は、何か作業をしながら歌ったり、仲間同士で歌ったり、子どもに聴かせたり、子どもと一緒に歌ったりすることのできる身近で重要な文化のひとつである。第四の生徒や卒業生も生活の様々な場面で歌い、周囲の人たちに歌を広める役割を気づかぬうちに担っていたと考えられる。

本研究では、大正 8 (1919) ~ 昭和 20 (1945) 年の長きにわたり、第四で音楽教師として勤務した野矢トキの音楽教育実践を取り上げ、卒業生の『音楽ノート』を手がかりにどのような歌が歌われていたのか、また、歌の音楽的特徴から見えてくる野矢の授業計画の一端を明らかにする。

## 1-2. 先行研究と本研究の位置づけ

高等女学校の音楽教育に関する先行研究には、戦前の大阪の女学校における授業実践をまとめた嶋田（2005）や、明治10～20年代の京都の女学校において、日本と西洋両方の音楽を教育していたことを明らかにした丸山（2011）、武蔵野高等女学校における一宮道子の実践に関する長尾（2017）のものがある。しかし、高等女学校が明治から戦後の学制改革まで存在し、最終的には全国に1400校を数えたことを考えると、事例研究が非常に少ない。

一方で、唱歌に関する研究は非常に多くなされており、関心が高い分野である。主な先行研究には、松村（2011）や江崎・澤崎（2017）のような明治から終戦頃までの教科書や唱歌集を収集し、変遷をまとめたものや、大阪音楽大学音楽博物館所蔵の明治期及び大正期に出版された楽譜目録を作成した小西（2008、2010）の研究がある。また、オンラインで検索可能な国立音楽大学附属図書館童謡・唱歌検索（2006）も重要な資料である。これらは高等女学校の教科書や女学生が歌っていた歌を知る手がかりとなるが、明治から戦前期の多数の教科書の所蔵場所が点在しているため、全て網羅することは難しい。また、実際にどのような歌を歌っていたのかというのは、当時の教科書から大体推測できるものの、卒業生の言説やノートによる裏付けも重要ではないかと思われる。しかし、卒業生の言説やノートをまとめた研究というものは見られない。

よって、本研究は高等女学校の授業実践研究であると同時に、明治から戦前期の、先行研究で触れられてこなかった教科書や歌を明らかにするものとなるだろう。

## 1-3. 研究の方法

本研究では、野矢の長女で、第四の昭和11（1936）年卒業生でもある村和子氏（1918-2016）の『音楽ノート』2冊及び『音楽ノート』に挟まれたプリント1曲を対象とし、『音楽ノート』に記された唱歌の作詞・作曲者、掲載されている教科書及び楽譜を明らかにすることを試みた。掲載教科書及び楽譜の収集には、「国会図書館」、「国会図書館デジタルコレクション」、「国立教育政策研究所教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ」、「広島大学図書館教科書コレクション」、「日本の古本屋」にあたった。また、情報収集には「国立音楽大学附属図書館童謡・唱歌検索」、小西（2008、2010）の明治期及び大正期の楽譜目録、江崎・澤崎（2017）の資料も活用した。

野矢の授業実践に関しては、同窓会から発行された記念誌や『会報』、卒業生の出版物から野矢や唱歌に関する言及をピックアップした。また、平成30（2018）年に行った卒業生及び野矢の孫へのインタビューからも手

がかりを得ることができた。インタビュー対象者は、昭和11（1936）年卒業生A氏、昭和21（1946）年卒業生B氏、野矢の3人の孫である。

これらの調査から、本研究では昭和6（1931）～昭和11（1936）年頃に第四で歌われた歌について、音楽的特徴を中心に明らかにし、野矢の授業計画がどのようなものであったか考察を行う。

## 1-4. 倫理的配慮

本研究では、卒業生及び野矢の親族にインタビュー調査を行うため、実践女子大学において「人間を対象とした研究に関する倫理審査」を申請し、2018（平成30）年9月3日に承認を受けている（承認番号2018承-21）。新たなインタビュー調査等を行う際にも、「実践女子大学研究倫理審査規程」を遵守し、承認された内容に沿って適切に研究を実施する。

## 2. 第四の音楽教師 野矢トキについて

### 2-1. 野矢トキの生涯

野矢トキ（繻、繻子、旧姓：吉田）は、明治23（1890）年に群馬県渋川市の呉服屋の四女として生まれた。明治41（1908）年に群馬県立高崎高等女学校を卒業し、東京音楽学校（現：東京藝術大学音楽学部）予科に入学、翌年本科器楽部オルガン専攻に入学し、島崎赤太郎に師事した。同級生には中山晋平や信時潔らがいる。明治45（1912）年に東京音楽学校を卒業すると、開校したばかりの愛知県女子師範学校に赴任し、結婚などの理由で大正3（1914）年頃退職した。夫の仕事の都合で東京に来た後、大正8（1919）年10月に第四に赴任し、昭和20（1945）年8月2日未明の八王子空襲により死去するまで、約26年という長きにわたり教鞭を執っていた。

### 2-2. 野矢の授業

野矢の音楽の授業は、グランドピアノが置かれている講堂で行われ、楽典と唱歌を扱っていた。教科書は、八王子市郷土資料館に所蔵されている昭和20年卒業生の楽典のものがある（小山作之助・島崎赤太郎編、福井直秋著（1915）『高等女学校 楽典教本』）。この教科書には、各項目にいつ学んだかが書き込まれており、およそ3年をかけて全体を学んでいたことが分かる。しかし、教科書はなかったという証言も多くあり、今後も調査が必要である。

歌の教科書も、卒業生A、Bの証言や昭和15年卒業生である西川（1989：56）<sup>3)</sup>の記述により、なかったと考えられる。実際、卒業生が使用していた教科書というものは1冊も見つかっていない。よって、野矢は自ら歌

を選曲して授業を行っていたことになる。

次に、歌を習得するまでのプロセスであるが、卒業生 A と B とともに、野矢の口述により楽譜を書いてから歌っていたと証言している（越山 2019 : 12）。具体的には、①野矢が「ド、四分音符」のように口頭で伝える音名及び音符の種類をノートに書き込む、②旋律を歌う、③野矢が口頭で伝える歌詞を書き込む、④作品名が伝えられる、⑤歌詞をつけて歌う、という流れであった。インタビューでは、卒業生 A と B とともにノートに書くのが大変で、追いつかなくなることもしばしばあり、音楽が得意な友人にノートを写させてもらったと話していた。しかし、今度はどのような曲を歌うのだろうかというワクワクしたという。生徒は、楽典を取り出して学ぶだけでなく、楽譜を書き、歌う中で楽典の知識も身につけていった。

### 3. 『音楽ノート』に書かれた歌

#### 3-1. 『音楽ノート』について

野矢の長女である村和子氏の『音楽ノート』は、戦災を免れ、和子氏によって大切に保管されたものである。2016 年に死去した後、子どもたちが遺品整理をしていた際に見つかり、インタビューの際に子どもたちから譲り受けたものである。

『音楽ノート』には黒い表紙と緑の表紙のものがある。黒い表紙のものには、裏表紙に「第二学年松組」と書かれている。また、ノートの最後の見開きページには楽典が書かれており、学習時期を知る手がかりとなるだけでなく、このノートが 1 年から 2 年生にかけては確実に使われていたことの裏付けともなると考えられる。縦書きで書かれた用語に該当する記号や図は右に書かれており、その順に記していくと、「楽符」、「譜表」、「休止符」<sup>4)</sup>、「音符記号」、「踏節法」「呼節法」「拍節法」<sup>5)</sup>、「三連音」の後に、「二学期」と書かれている。「二学期」からさらに右に読んでいくと、「正格小節」「変格小節」、「縦線」、「拍子」、「強弱」<sup>6)</sup>、「切分音」<sup>7)</sup>、調と調号一覧が続く。ページが変わり、「三学期」とあり、「臨時記号」が書かれており、「二年一学期 速度標語（イタリー語）」で記述が終わっている。歌は歌詞のみも含めて 44 曲書かれており、いつ何を歌っていたかが分かる記述はない。

緑のノートには「第四学年竹組」、「第五学年竹組」と書かれている。歌は歌詞のみも含めて 12 曲あり、楽典に関する記述はない。

『音楽ノート』にはプリントが何枚か挟まれていたが、《須磨乃曲》のみ「第 5 学年竹組」という記入があったため、第四で歌っていたことが明らかなものであると判断した。

#### 3-2. 一覧表を作成するにあたって

巻末表には、『音楽ノート』2 冊に書かれた歌 56 曲と、プリントの《須磨乃曲》1 曲の計 57 曲をまとめた。ただし、緑のノートに書かれた詩 1 編は、タイトルがなく、薄い鉛筆書きで断片的にしか読み取ることができなかったため、空欄となっており、今後も調査を継続していく。表の作成では、「国立音楽大学附属図書館童謡・唱歌検索」及び小西（2008、2010）の楽譜目録に掲載されている情報を参照し、筆者が本研究に必要な情報を追加した。具体的には、タイトル、作詞者、作曲者、歌い出しの歌詞とインチピット、調、最低音と最高音、声部数、拍子、筆者が今回掲載を確認できた出版譜（教科書及び楽譜）の情報を記載した。不明な項目は空欄としている。原曲が分かるものについては、備考欄に記入した。『小学唱歌集』に掲載されたものは櫻井ほか（2015）の巻末資料「『小学唱歌集』全曲の原曲リスト」を参照し、賛美歌に関しては「Hymnary.org」で検索を行った。

インチピットは、冒頭の旋律の音を示すために用いた。表示の際には、「冒頭の旋律から休符、リズム、音高は除外している（移動ド唱法）。旋律はドレミファソラシ（1 2 3 4 5 6 7）の順位でならべた」という「国立音楽大学附属図書館童謡・唱歌索引」の凡例に倣っている（国立：2006）。例えば、巻末表の最初の歌《たゆたふ小舟》は、インチピットに「555#45123」、調に「変イ長調」と書かれているので、実音を日本音名で示すと、「変ホ 変ホ 変ホ ニ 変ホ 変イ 変ロ ハ」となる。出版譜に関する情報のうち出版年については、歌がいつから世に出回っていたのかを知るため、初版年を掲載した。

#### 3-3. 考察

##### 3-3-1. 歌の分類

まず、作曲者の出身地について調査をしたところ、以下の通りになった（単位は曲）。

日本 18	ドイツ 7	イタリア 7	イギリス 4
アメリカ 4	オーストリア 3	フランス 3	
スコットランド 1	ベルギー 1	ロシア 1	
チェコ 1	不明 6		

外国曲は全部で 32 曲となり、日本の曲を大きく上回った。国別で最も多かったのは日本で、次いでドイツ語圏の作品がみられた。英語圏の作品も多く、数は少ないがフランスやチェコなどヨーロッパ各地の作品が取り上げられていることが分かる。

授業で扱われた歌のジャンルについて、作曲家の出身地との関係で見たい。ドイツ、オーストリア

には、ウェーバー (1786-1826) のオペラのアリアや、シューベルト (1797-1828)、ブラームス (1833-1897)、メンデルスゾーン (1809-1847)、ジルヒャー (1789-1860)、ヴェルナー (1800-1833) のドイツ・リート、ドイツ民謡が並ぶ。また、イタリアにはヴェルディ (1813-1901) やベッリーニ (1801-1835) のオペラのアリア、トスティ (1846-1916) の歌曲、マリオ (1884-1961) のカンツォーネが含まれる。フランスにもマスネ (1842-1912) の歌曲やサン＝サーンス (1835-1921) のオペラのアリアがある。チェコ出身、ドヴォルザーク (1841-1904) のピアノ作品《ユーモレスク》には、笹野堅による歌詞が付けられている。このように、西洋音楽史のうち19世紀ロマン派の作品が並んでいることが分かった。バッハなどのバロック音楽や、ベートーヴェンやモーツァルトなどの古典派音楽が取り上げられていないことも興味深い。

アメリカやイギリス、スコットランドの英語圏の音楽には、『小学唱歌集』に掲載されたものも含まれており、原曲が民謡や伝承曲、賛美歌であるものが多い。この選曲には、アメリカに渡って西洋音楽を学んだ伊澤修二<sup>9)</sup>と、伊澤の師であるメーソン<sup>10)</sup>を中心とした、音楽取調掛における明治初期の洋楽受入れの影響があったのではないだろうか。伊澤とメーソンは賛美歌やスコットランドやイギリスの民謡を日本の音楽教育に取り入れ、『小学唱歌集』の編纂に取り組んだ。音楽取調掛及び東京音楽学校は唱歌教育を全国に広めるために、唱歌教員の養成と教科教材の作成という一定の役割を果たすと、今度は演奏家の養成に重点を置き、ヨーロッパを中心とした西洋芸術音楽の演奏技術の習得に力を入れるようになる。野矢の選曲からは、こうした明治の音楽取調掛から東京音楽学校における西洋音楽の受入れの様相を見ることができる。

日本人によって作曲された歌も、西洋音楽を学び、西洋音楽の理論に則って作られている。《さくらさくら》や《子守歌》のような日本古謡も含まれているが、《さくらさくら》は4声の合唱曲に編曲されたものである。旋律自体は陰音階でできているが、和声がつくことで陰音階にはない、西洋の和声短音階に含まれる音が用いられることから、二短調の「陰音階風」の作品となっている。《子守歌》については、ノートに楽譜が書かれていないので断定はできないが、当時山田耕筰が編曲したものが存在していることから、もし山田編曲版が使われていたならば、長音階の第7音(導音)が用いられているため、ホ長調の「陽旋法風」の作品となる。よって、野矢の授業では主に西洋音楽に属する作品を扱っていたと言える。

### 3-3-2. 音楽的特徴

本項では、『音楽ノート』に楽譜が書かれていた51曲を対象に考察していく。

まず、拍子については、表1に種類ごとの曲数をまとめた。なお、曲の途中で拍子が変わる場合は、曲の終わりの拍子でカウントしている。その結果、およそ半数が四分の四拍子で、それに次いで八分の六拍子が多かった。黒い表紙のノートにある楽典のページでは、拍子について「二拍子の中 2/2 2/4」「三拍子の中 3/4 3/8」「四拍子の中 4/4 4/8」「六拍子の中 6/8」という書き込みがある。このうち、二分の二拍子と八分の四拍子は目にする機会が少ないので、よく使われる拍子は一通り網羅していたと言って良いだろう。

注目すべきは、弱起、つまりアウフタクトの歌が多い点である。歌がアウフタクトで始まる曲は21曲あり、うち13曲が外国曲であった。黒い表紙のノートにある楽典のページには、「正格小節」と「変格小節」という用語があり、強起と弱起、つまり1拍目から始まる曲とアウフタクトの曲の違いについて学んでいる。歌を見ていくと、イギリスの曲は4曲全てアウフタクトで、ドイツ、オーストリアの作品でも半数にのぼる。これは、英語やドイツ語の冠詞と名詞の文構造が影響している。冠詞と名詞が並ぶと、名詞の語頭にアクセントが来るため、音楽で強拍にあたる1拍目に名詞の語頭をのせることから、冠詞が前に出てアウフタクトになる。授業では日本語で歌うため、音楽の流れが原語で歌う時と変わるのではないかと考えられる。というのも、日本語には語頭を丁寧に、重みをのせて歌わないと言葉が聞き手に伝わらず、強拍である1拍目にアクセントをつけると言葉が不自然に聞こえてしまうことがあるからである。日本の歌では18曲中8曲の歌い出しがアウフタクトとなっている。アウフタクトで始めると、音楽の流れ、前へ進む力が高まる効果があると考えられる。

表1 拍子の種類

拍子	曲数
四分の二拍子	5
四分の三拍子	6
四分の四拍子	23
八分の三拍子	4
八分の六拍子	13

次に、調について見ていきたい。表 2 は、調についてまとめたものである。これを見ると、長調の曲が 42 曲と圧倒的に多く、短調は 7 曲であった。なおロシア民謡である《船唄》は、西洋音楽の理論には当てはまらない節回しが見られることから不明とした。長調の曲では、ハ長調とシャープ（＃）とフラット（b）ともに調号 4 つまでの計 9 つの調が用いられ、シャープとフラットの曲数はそれぞれ 18 曲、16 曲と大差は見られなかった。短調の曲には、イ短調をはじめとする 6 つの調が見られ、フラットの調が 4 曲と多かった。

表 2 調一覧表

調	曲数	調	曲数
ハ長調	8	イ短調	2
ヘ長調	4	ニ短調	1
変口長調	3	ト短調	2
変ホ長調	5	ハ短調	0
変イ長調	4	ヘ短調	1
変二長調	0	変口短調	0
変ト長調	0	変ホ短調	0
嬰ヘ長調	0	嬰ニ短調	0
口長調	0	嬰ト短調	0
ホ長調	1	嬰ハ短調	0
イ長調	2	嬰ヘ短調	0
二長調	8	口短調	1
ト長調	7	ホ短調	1
		不明	1

調と関連して、各曲の最低音と最高音を調査した。合唱の場合は、声部関係なく抽出した。最も音域の広い曲は《羽衣之舞》で、ト音～2点ト音までの2オクターブあった。他の曲でもこの2オクターブの間に収まっている。巻末表を見ると、1冊目の終わりから2冊目にかけて音域が広がっていることが分かる。1冊目の前半にある《ローレライ》、《雨が降る》、《初春》の連続する3曲でも最高音が2点ヘ音以上で高いが、最低音も比較的高いので、音域の狭さが1冊目後半から2冊目にかけての音域の広がりとは異なる点である。高女の在籍期間は12歳～17歳の5年間なので、多くの生徒がこの間に変声期を経験するだろう。その際、声が出しにくくなったり、高音が出なくなったりすることがあるので、1冊目のノートにおいて音域が2点ホ音を超えない曲が多いのではないかと考えられる。また、音域が広い曲は2～4

声の合唱曲であることがほとんどで、全員が2点ト音まで出さなくて済む。これらのことから、歌の学習順と学びの計画性、発展性に関連があると言えるだろう。

また、《たゆたふ小舟》や《ローレライ》では、出版譜と『音楽ノート』で調が異なっていた。いずれも出版譜よりも下げており、生徒が無理なく歌えるようにするための野矢の配慮だったのではないかと考えられる。

音域と声種の関係についても触れておきたい。合唱でアルトが加わると、イ音やト音が出てくるが、斉唱の曲は概ねロ音から2点ト音の音域で書かれており、この音域が日本人女性の最も多いメゾソプラノの声域と重なっている。2点ホ音よりも高い音は、声域とは言え、出すのが大変である。しかし、歌う経験を積みながら音域を広げていき、オペラのアリアや合唱曲に挑戦できるように計画されていたのではないかと考えられる。

### 3-3-3. 出版譜の検討

『音楽ノート』に書かれた歌が掲載された教科書や楽譜の初版年を確認すると、明治期 21 曲、大正期 8 曲、昭和期 20 曲、不明 7 曲となった。今後、調査を継続する中で、より古い楽譜が出てくる可能性があるが、本項ではこれまでに収集した教科書及び楽譜からについて検討する。

明治期に出版された教科書には、先述の『小学唱歌集』や東京音楽学校発行の『中等唱歌集』、『明治唱歌』、『女学唱歌』、『女声唱歌』、『重音唱歌集』があった。これらには、後世に親しまれる歌が多く収録されている。『女声唱歌』は、原詩に忠実な訳詞で歌うことを目指した画期的な教科書であった。その中心的存在であった近藤朔風（1880-1915）の訳詞による《ローレライ》や《菩提樹の歌》、《野中のばら（野ばら）》は、現在も多くの人に親しまれている。また、『重音唱歌集』には、第四の明治 45（1912）年の第 1 回卒業式から歌われている《感謝》と《送別の歌》が収録されている。《感謝》は卒業生が歌い、《送別の歌》は在校生が歌うことになっており、卒業生 B によると、在校生は卒業時に《感謝》を歌うことに憧れていたという。このように、明治の出版教科書からは、愛唱歌というべき歌が選曲されていたと考えられる。

大正期の出版譜からは、『尋常小学唱歌』や講習会教材である『小学校教材唱歌科教材集』のように、小学生対象の歌が取り上げられている。また、《夜の調べ》や《真白き富士の嶺》のようにピース楽譜として出版された歌や、《はなれ小島の椰子の木》のように童謡の楽譜集から取り上げた曲があり、教科書に限らない、時代の流れを取り入れた歌も見られた。

昭和期の出版譜は、和子氏が第四に在籍していた昭

和6～11（1931-1936）年に出版年が近い教科書が見られる。『昭和女子中等教科書 巻之一』や『女子音楽教本4』のように複数曲が連続して取り上げられていたり、『新調女声唱歌、中』や『女声曲集 第5編』のように飛び飛びで出てきたりすることも多いことから、これらの教科書は野矢自身が見ていたのではないかと推測される。また、昭和7（1932）年のロサンゼルスオリンピックのために作られた応援歌《走れ！大地を》は、レコードの売り上げも良く、次のベルリンオリンピック（1936）でも歌われたという。第四は水泳部の強豪校で、オリンピック候補選手を輩出するほどだったため、学校全体で水泳部や大会を盛り上げる意図もあったのではないかと推測される。

以上のことから、野矢は教科書だけでなくピース楽譜や曲集からも歌を取り上げていたことが明らかとなった。世代を超えて愛される愛唱歌と、時代の流れに沿って歌を選曲していたと考えられる。

#### 4. おわりに

これまでの考察から、本研究では野矢の授業で扱った歌の特徴について以下のことが明らかになった。

- ①西洋音楽に属する歌が取り上げられ、作曲家や作曲者の出身地の音楽性を感じられるようなジャンルの選択と選曲が行われていた。
- ②楽典の知識が、歌を通して定着するよう、計画的に授業がされていた。一般的な拍子、アウフタクトを網羅し、調号はシャープ、フラットとも4つまで、かつメゾソプラノの声域に収まるような配慮が見られた。
- ③出版譜には教科書だけでなくピース楽譜や楽譜集があり、明治期からの愛唱歌と時代の流れを取り入れた歌が見られた。

西洋音楽の様々なジャンルの曲を、国ごとの音楽性を感じられるように取り上げていることで、野矢の授業が生徒たちの洋楽受容の入り口として果たした役割は、非常に大きかったと考えられる。また、ただ名曲を歌うだけでなく、野矢の歌の選曲には予想以上にシステムティックな授業計画が含まれていたことに驚いた。楽典と歌どちらか一方に偏ることなく、歌を通して楽典が身につっていくバランスが保たれていたように思われる。西洋音楽のみを扱った授業である点は、野矢の東京音楽学校での学びの影響が感じられるが、愛唱歌と時流に沿った歌を盛り込む点は、歌唱共通教材を入れながら、生徒たちに親しみのある流行歌を取り入れた現在の音楽教育にも類似していると考えられる。

今回の研究では、歌詞の内容や特徴については触れることができなかったため、野矢が歌詞から何を教えようとしたのかは今後の課題としたい。

#### 謝辞

研究にあたり、村和子氏の『音楽ノート』をお譲りいただいたご家族の皆様、インタビュー調査にご協力いただいた卒業生のA氏及びB氏、資料の収集にご協力いただいた東京都立南多摩中等教育学校同窓会あかね会の皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、本研究は、実践女子大学より「2019年度実践女子大学・短期大学部研究助成」及び「2019年度特定研究奨励金」の助成を受け、遂行することができました。厚く御礼申し上げます。

#### 注

- 1) 八王子市…明治22（1889）年4月神奈川県南多摩郡八王子町として町制を施行し、明治26（1893）年4月に東京府に編入した。さらに、大正6（1917）年9月に市制施行し、現在に至る。
- 2) 横川様子は、明治11（1878）年より東京女子師範学校（現：お茶の水女子大学）で学び、附属幼稚園で保姆、教師として働いた経験を持つ。父親の死後、八王子に戻ったが、教育の遅れを痛感し、私立八王子女子学校と八王子幼稚園を設立した。
- 3) 西川勢津子（1922-）…第四を卒業後、日本女子大学に進学し家事評論家として活躍。主な著書に桑井いね名義による『おばあさんの知恵袋』（1976）がある。
- 4) 当時の楽典教科書で多くみられた表記である。また、卒業生Bもインタビューの際、「休止符」と仰っていた。現在では、「休符」と言うので、Bの第四での学びが反映されていると考えられる。
- 5) 黒い『音楽ノート』には、「踏節法（足で数へる）」、「呼節法（口で数へる）」、「拍節法（手むちで数へる）」とあり、拍の数え方についての説明だと分かる。
- 6) ここで言う「強弱」はフォルテやピアノといった強弱記号ではなく、強拍、弱拍のことである。
- 7) 「切分音」…シンコペーション。
- 8) 『小学唱歌集』…明治15～17（1882-1884）年に音楽取調掛から出版された全3編からなる音楽教科書で、五線譜に書かれた日本初の教科書として知られている。第1編33曲、第2編16曲、第3編42曲の計91曲からなる。
- 9) 伊澤修二（1851-1917）…長野県高遠の出身。文部省の官吏としてアメリカに留学し、メソソンに師事した。帰国後は音楽取調掛、のちに東京音楽学校初代校長として日本の音楽教育の礎を築いた。伊澤の渡米を機に、賛美歌やヨーロッパからアメリカに渡ったスコットランドなどの民謡が多数輸入され、

『小学唱歌集』などを通して人々に広まった。

- 10) ルーサー・ホワイトティング・メーソン (1818-1896) …アメリカの音楽教育者。歌の収集を行い、アメリカの音楽教育確立に貢献した。日本では、明治 13～15 (1880-1882) 年に音楽取調掛において『小学唱歌集』の編纂に関わるなど、日本の音楽教育確立のために尽力した。

## 引用・参考文献

- 江崎公子・澤崎眞彦編 (2017) 『唱歌大事典』東京堂出版。
- 越山沙千子 (2018) 「【歴史発見】 第四高女時代の音楽教諭 野矢トキ先生」南多摩同窓会あかね会会報『みなみたま』第 9 号、8-9 頁
- 越山沙千子 (2019) 「【歴史発見】 野矢トキ先生の音楽の授業」南多摩同窓会あかね会会報『みなみたま』第 10 号、12 頁。
- 櫻井雅人、ヘルマン・ゴチェフスキ、安田寛 (2015) 『仰げば尊し——幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡』東京堂出版。
- 東京藝術大学百年史編集委員会 (1987) 『東京藝術大学百年史 東京音楽学校篇』第一巻、音楽之友社。
- 東京藝術大学百年史編集委員会 (1998) 『東京藝術大学百年史 演奏会篇』第一巻、音楽之友社。
- 西川勢津子 (1989) 『勢津子おばさんの青春物語』主婦の友社。
- 福井直秋 (1915) 『高等女学校 楽典教本』共益商社書店。
- 丸山彩 (2011) 「明治 10 年代～20 年代の京都府女学校・京都府高等女学校における音楽教育の展開」『音楽教育学』41 巻 2 号、13-24 頁。
- 国立音楽大学附属図書館 童謡・唱歌索引 (2010～) (<https://www.lib.kunitachi.ac.jp/collection/shoka/shoka.aspx>)
- 国立教育政策研究所教育図書館 近代教科書デジタルアーカイブ (<https://www.nier.go.jp/library/textbooks/>)
- 国立国会図書館 (<https://www.ndl.go.jp/>)
- 国立国会図書館 デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>)
- 広島大学図書館 教科書コレクション画像データベース (<http://dc.lib.hiroshima-u.ac.jp/text/?jsessionid=653ABD757A6C5EB2E479AB555774983C>)

Hymnary.org (<https://hymnary.org/>)

入手した教科書、楽譜については、巻末表を参照のこと。

## 巻末表 凡例

- 1) 「曲名」…『音楽ノート』の表記に従い、読みにくいものはフリガナを併記した。
- 2) 「作詞者」…出版譜の情報や調査に基づき、訳詞もしくは作歌した人物名を掲載した。原作者は備考欄に追記した。
- 3) 「作曲」…出版譜の情報や調査に基づき、「作曲者」と作曲者の「出身国」を記入した。
- 4) 「冒頭歌詞」…冒頭 1 フレーズの歌詞を『音楽ノート』の表記のまま記入した。
- 5) 「インチピット」…「冒頭歌詞」の部分の旋律を音高とリズムを除外し、移動ドで表記した。「ドレミファソラシ」を「1234567」で示している。
- 6) 「調」…作品の調を示しているが、転調が含まれる場合は作品の終わりの部分の調を記入している。
- 7) 「最低音」「最高音」…歌の最低音と最高音を、日本音名を用いた音高表記で示した。1 点ハ音は鍵盤楽器中央のハ音 (Do) である。
- 8) 「声部数」…『音楽ノート』に書かれた編成を示した。
- 9) 「拍子」…拍子とアウフタクトの場合は「(弱起)」を記入した。
- 10) 「収録書」…「書名」「編著者」「出版社」「出版年」「入手先」を記入した。「出版年」には原則として初版年を記入した。
- 11) 「入手先」  
「デ」…国会図書館デジタルコレクション  
「広」…広島大学図書館 教科書コレクション画像データベース  
「古」…古書  
「芸」…東京藝術大学百年史編集委員会 (1987) 『東京藝術大学百年史 東京音楽学校篇』第一巻、音楽之友社。
- 12) 「備考」…原曲や原詩作者、歌詞のみの場合などの補足情報を記入した。
- 13) 現時点で不明な項目は空欄とした。

(2019 年 12 月 5 日受理)





ノート	曲名	作詞者	作曲		冒頭歌詞	インチャピット	調	最低音	最高音	声部数	拍子	収録書(教科書、CD-ROM等)		出版年	入声先	備考
			作曲者	作曲者								編著者	出版社			
	櫻咲る	林右深 (作歌)	アメリカ	作曲家	やまかせよとふけ ば	1345561765	二長調	1点ニ	2点ホ	1	4/4	小学校国語教科書	112 (1923)	古	原曲:《O B Back bo》	
	山笠のすまひ	池田龍雄 (作歌)	イタリア		ちりのものがれてや まのおくの こげやこげやいさみ てこげや	34313431343654	ト長調	1点ト	2点ホ	1	3/8	女子音楽教本4	S6 (1931)	古	原曲:《結婚 (La Trenchid)》(Page, O Gram) (二重編)	
	船頭	生井武久 (作歌)	ロシア		やまはやおほるに		1点ホ	2点変ホ	1	4/4	女子音楽教本4	S6 (1931)	古			
	子守歌	笹野聖 (作歌)	チェコ		あくるうみよ	12123565	二長調	1点ニ	2点ホ	1	2/4	女子音楽教本4	S6 (1931)	古	原曲:《ユエモレスク》	
	朝の海	堀江時三 (作歌)	イタリア		あなたのほきへと	333542	ト長調	1点ニ	2点ホ	1	3/8	女子音楽教本4	S6 (1931)	古	原曲:《リゴレット》(女性の歌)	
	月見草	永村農三 (作歌)	アメリカ		まどにちかき	556512221	ハ長調	1点ホ	2点ホ	1	6/8 (朝比)	下総院一	S5 (1933)	古		
黒い	子守唄	笹野聖 (作歌)	ドイツ		まどにちかき	335335	二長調	1点ニ	2点ニ	1	3/4	女子音楽教本3	S7 (1932)	古	教科書は2声	
表紙	涙の香 (トワソハル)	青木歌子	日本		なのほなの	534565	変ホ長調	1点変ホ	2点へ	1	2/4 (朝比)	新調女声唱歌、中	S6 (1931)	子	原曲:《Com e Come Pretty Bird》	
	つばめ	John H. Hillow et	アメリカ		こよこよや	332345	ヘ長調	1点へ	2点へ	1	6/8	小学唱歌集 第2編	M 16 (1883)	子		
	行く春	岡野貞一	日本		みはてめゆめの	367163423	ト長調	1点ニ	2点へ	1	6/8 (朝比)	新調女声唱歌、中	S6 (1931)	子		
	よろこび				よころびおねに	175122	ト長調	1点ニ	2点ホ	1	2/4 (朝比)					
	オリンピックの 聖歌	斎藤龍	日本		はしれたちを	56512643	変ホ長調	1点ハ	2点へ	1	4/4 (朝比)	小学唱歌集 第2編	S7 (1932)			正式名:オリムピック派遣選手応援歌 《花れ!大地を》
	悲歌	飯田忠純 (訳)	フランス		かまろいのほるのな こり	665f44361	ホ長調	ロ	2点へ	1	4/4	女子音楽教本5編	S5 (1930)	子	原曲:《エレジー》	
	羽衣の舞	水田詩山 (作歌)	ドイツ		せいしょうほうはくもの みほのうらべ	345365317671	ト長調	ト	2点ト	4	6/8 (朝比)	羽衣の舞:四部合唱曲/ ウェーバー原曲:水田詩山作 編者編曲:黒澤 朝、小川一朗 (no.1008)	S8 (1933)			
	さくらさくら	日本古謡	日本		さくらさくらやよい のそらは	1121212321216	二短調	ト	2点へ	4	4/4					
	磯崎の里	飯田忠純 (訳)	イタリア		つぎのおけうとく なめゆるけるくふね はいてゆく	17533137	変ホ長調	1点変ホ	2点へ	1	3/8	女子音楽教本5編	S5 (1930)	子	原曲:《あめ、そは彼の》	
	遙かなるサンタルチア	高田清 (訳)	イタリア			3332113334355	変ホ長調	1点変ホ	2点ト	1	3/4	音楽指導協会		子		
	節の歌 セラナーデ	飯田忠純 (訳)	イタリア		わがうたふうた※	1566753	変ホ長調	1点ニ	2点変ホ	1	4/4	伊達堂	S5 (1930)	子	原曲:《セラナータ》	
	心花咲く	飯田忠純 (訳)	フランス		きまよほん※	555676	ハ長調	ロ	2点ホ	1	3/4	伊達堂	S5 (1930)	子	原曲:《サムソンとデリラ》(あなたの声に私の心 は閉く)	
緑	感謝	レンツ			あめのひもかせのひ も	11231333453	二長調	イ	2点ホ	2	2/4	重音唱歌集 第1集	M 33 (1900)	古	卒業式で卒業生が歌う	
	原白き富士の嶺	三角陽子 (作歌)	アメリカ		ましろきふじのね	51112353321	ヘ長調	1点ハ	2点へ	1	6/8		T5 (1916)			歌詞のみ。作曲年はM 43。《原歌 (原白き富士の 嶺)》とも。原曲:賛美歌《The Lord into His Garden Comes》
	卒業の歌	音楽社学術部員	イギリス		まなびのみらには	5555565643	ヘ長調	1点ハ	2点へ	2	4/4 (朝比)	和洋名曲集	M 42 (1909)	子	《桜》(舟子)と同曲	
	浜辺の歌	林古溪	日本		あしたはまへを	551221261	変イ長調	1点変ホ	2点へ	1	6/8	池田勝太郎 (発行)	T5 (1916)			6小節目までの旋律のみで、歌詞は書かれていな い。
	ヴェニス島の唄	メンチルスローン	ドイツ		まおにゆらかせらさ されば	11716f5644643	ロ短調	1点ホ	2点変へ	1	6/8 (朝比)					原曲《6つの歌》(ヴェネツィアの舟歌) Op. 57- 5
リ ン ト	須磨乃曲	北村季晴	日本		らいてんへきえき	55556	ホ長調	イ	2点ホ	3	4/4	叙景唱歌 第一編	M 37 (1904)	古		途中、転調及び拍子の変更がある。プリント(第5 学年、組、氏名が記入されていたことから裏に加え た)

## 和文抄録

本研究では、東京府立第四高等女学校の音楽教師、野矢トキ（1890-1945）の授業実践について、1936年卒業生の『音楽ノート』に書かれている歌を手がかりに、音楽面の学びの特徴を明らかにするものである。野矢の授業では、西洋音楽に属する作品を日本語の歌詞で歌い、原曲には国ごとの特徴を示す民謡や伝承曲、歌曲、オペラのアリアが多くみられた。また、歌を通して楽典を学べるよう、よく使われる拍子や調を網羅する工夫、生徒たちが歌いやすいようメゾソプラノの声域に収まるような配慮が見られた。そして、世代を超えて歌い継がれる愛唱歌と、時代の流れを取り入れた歌を取り上げ、教科書に限らず様々な楽譜にあたって選曲をしていたことが明らかになった。